



# わたしの聖戦

女性が働くことについて

166

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## 相模原殺傷事件が教えてくれたこと

7月下旬に起きた「相模原殺傷事件」は、日本のみならず世界中に衝撃を与えた。元職員による施設入所者の大量殺人事件は、間違はなく歴史に残る大惨劇となった。さらに、事件とその犯人をめぐる浮彫りになった複雑な事態と重い課題は、そのまま日本の障害者をめぐる対策や対応を再考するきっかけとなっている。

例えば、亡くなった方々の氏名は公表されていない。これは遺族全員の意向に沿うものだが、一方で警察とマスコミの根深い攻防戦を引き起こしている。

また、事件から間もない8月6日には、東京先端科学センターで追悼会が開催

いが、戦前はそれが当たり前であった。優生保護法は戦後、母体保護法と名を変えたものの、一部とはいえ、人々の障害に対する差別感や偏見まで変えることにはいたらなかったのだという現実が、今回の事件で明らかになった。

絶することが許される。検査は信頼度100%ではないのだが、スタート以来検査を希望する妊婦が予想以上に多いという。しかも検査の結果が陽性（胎児に異常あり）といわれた妊婦の、実に90%が中絶をしていることもわかっていく。その

苦渋の選択を責めるつもりは毛頭ないが、これ

とて優生思想の表面化の一環といえるだろう。さらに気になるのは、障害者を取り巻く環境

である。日本は、あらゆる障害者を施設内に囲い込む施策を取り続けてきた。今回の事件の舞台となった施設も例にもれず、交通の便の悪い、人里離れた場所にある。どの施設も、外部との交流の機会を図ることで閉鎖的といわれる環境を風通し良くするよう最大の努力をしているが、もともと体よく隔離されているのだ

から、施設側の努力にも限界がある。

そのような環境にあって、低賃金での過酷な重労働や閉ざされた人間関係にさらされることは、時にいびつな人格形成の土壌をつくる。誤解を恐れずにいえば、犯人もまた国の施策の被害者でもあるのだ。

2005年の障害者自立支援法成立以降、障害者とは、知的・身体・精神、発達障害すべてを含むこととなった。もともと、完璧な人間など存在しない。人は皆、未発達・未成熟なまま生き、人に迷惑をかけながら老いて死んでゆく。そう考えれば、すべての人間はどこかに障害を持っているし、高齢になれば否応なく障害は助長されるものである。

バリアは人の心の中にある。人間同士の間で塀や壁を作ることで、おかしなことだと今さらながら思わずにはいられない。

イラスト・伊藤栄章



妊娠した際に、胎児の障害の有無を調べる検査がある。従来は羊水を採取していたが、2年前から血液で検査ができるようになり、その簡便さや高齢出産の増加に伴って注目を浴びた。検査の結果、胎児に染色体異常があると分かれば、中

法が存在し、本人の意思に関係なく障害のある胎児の中絶や不妊手術が行われていた。ハンセン病患者に対する理不尽な不妊手術は、その代表だろう。優生思想に導かれた障害者への対策や事件犯人の発言は、一見とんでもないことのように思うかもしれない